

先見経済

Management & Economic Information SENKEN KEIZAI Since1938

好評連載

いま医療で起きていること 和田 努

中国古典に学ぶトップの人間学 境野勝悟

時論 ビデオジャーナリスト、ソーシャルメディアコンサルタント 神田敏晶

特集

公的機関の〈お得な〉使い方

有限会社エディット「まごころ研究所」企画室長

マーケット・アナリスト

糸井成人

シリーズ・この国の未来

「無機物無溶剤塗料の開発によって 無公害社会の実現を目指す」

鈴木産業株式会社代表取締役 鈴木富男

聞き手／国民政治研究会理事長 田中克人

太平洋戦争における海外戦没者の数は240万人。そのなかのかなりの数の人たちが、今も家族の元に戻ることなく、現地で眠り続けている。笹氏はそんな現状を憂い、そうした方々の遺骨収集活動をしている1人だ。今回は、あまり目を向けられない遺骨収集の実際について伺った。

ジャーナリスト 笹 幸恵

聞き手／山口哲史 株式会社プロ・アウディティブ代表

私たちの生きる国が

どのような歴史をたどってきたのか。

それこそが「軸」となる

いまだ115万人が 家族のもとに還っていない

山口 笹さんは太平洋戦争中に戦地で亡くなられた方のご遺骨の収集をしておられますね。その原点はどこにあるのでしょうか。

笹 子どものときに植え付けられた「恐怖心」が原点でしょうか。絵本や映画などを見て戦争の悲惨さを知りました。いまでも思い出するのが「象のいない動物園」というアニメ映画。昭和18年に上野動物園で実際にあった話をベースとしたもので、爆撃で街に逃げ出したら危険だと多くの動物が殺されていく話です。号泣しましたね。なぜ象は死ななくてはならなかったのか。なぜ多くの人が死んでしまったのか……。考えてもわからない。いま戦争が起きて、父母がいなくなってしまうたらどうしよう——そう考えると本当に怖かったですね。同世代の人たちも、例えば「はだしのゲン」などの作品を読んで同じような経験をしているとと思います。

山口 でも、遺骨収集などの活動までされる方はほとんどいません。なぜでしょうか。

笹 多くの人が、怖いから見たくない、と思うからでしょう。自己分析すると、私の場合は恐怖心よりも好奇心のほうが勝っていたのかもしれない。祖父母も健在でしたから、「この人たちは、どうやって戦争をくぐり抜けて、生きているのだろう」とい



【ホスト】山口哲史 Tetsushi Yamaguchi

1961年兵庫県生まれ。関西学院大学商学部卒業後、リクルートなどを経て90年、現(株)プロ・アクティブの前身のフィールド・アクティブを設立。竹100%でできた繊維など自然でピュアなエネルギーを活用した「人を自然に輝かせる(ラディアンズ)」力のある健康、美容商品の企画・販売を手掛ける。社内外ともに「ガッツさん」の愛称で親しまれている。
<http://www.pro-active.co.jp>

ろいろと考えたりもしましたからね。

山口 そうしたことがベースにあつて、遺骨収集をしようと思ったわけですか。

笹 最初から遺骨収集をしようと思ったわけではありません。太平洋戦争に興味を抱き、さまざまな本を読んだところで、よくわからない。ならば現地へ行つて、自分の肌で感じてみたいと思つたのです。そこで、戦地を訪ねる慰霊巡拝の旅に参加しました。今まで訪れたのは、ギルバート諸島やソロモン諸島、マリアナ諸島、バラオ諸島、硫黄島など、南太平洋の島々が中心で、十数カ所にのほります。

山口 実際に行かれていかがでしたか。

笹 現地で、遺骨収集事業をやっている政府派遣団に出会ったんです。彼らが発見した遺骨を現地で茶毘にふすところにも立ち会つて……。まだ、こんなに遺骨が残されているのかとショックでしたね。このままにしておいてはいけません。

山口 衝撃を受け、使命感のようなものを抱かれたわけですね。政府は、いつごろから遺骨収集事業をはじめたのですか。

笹 日本が主権を回復した1951年のサンフランシスコ講和条約締結直後から動き出しています。当時は、戦争の傷跡も生々しく、復員された方々も働きかけたことが

あり、毎年9万人前後のご遺骨をご家族のもとに還すことができた時期もあります。ところが、時が経つにつれ関心が薄くなつてしまい、最近では事業自体を知らない方が増えてしまいました。結果、海外戦没者は240万人といわれていますが、そのうち実に115万人が戻っていません。この問題を解決するには、若い人にいかに興味を持ってもらうかがカギだと考えています。

自分たちの「軸」はどこにあるのか？

山口 しかし、学校では太平洋戦争について偏った歴史観が教えられているようです。

笹 実際、私たちの世代では太平洋戦争について詳しいことは学んでいません。日本は戦争をして周辺諸国に迷惑をかけた——それぐらいの認識です。多くの人は、それに疑問を抱かず、そのままにしている。だから、とてもご遺骨のことまで考えない。私自身も疑問の思いながらも30歳になって、やっと現地に足を運んでいろいろと知りました。そう考えると、ご遺骨の収集までを若い人に考えてもらうためには、その前に何段階もの過程が必要となるでしょう。

山口 徴兵されて戦争に行った人たちがどんな気持ちだったのか。その人たちの犠牲のうえに現在の日本があること。まず、そうしたことには思いを来す必要がありますね。
笹 誇りをもって戦地に赴いた人、嫌々徴兵された人、いろいろいらつしやるでしょ

う。でも、そこで命を賭けて戦い、武運つたなく亡くなつてしまった。そうした方を弔い供養する、あるいはご遺骨を持ち帰るのは、私たち以外に誰がやるのかと思ひます。彼らは、日本の未来のために戦つたといつていい。未来とは、私達が生きている今です。関係ないとは私にはいえません。

山口 貧困で苦しむ国に寄付をしたりすることも大切ですし、その行為自体は現在起きていることなのでわかりやすい。でも、自分たちの「過去」にも意識を向けることは必要でしょうね。

笹 そうですね。私の場合でいえば太平洋戦争は祖父の時代ですが、祖父がどんな想いで生きてきたのか。また、自分の生きる国がどのような歴史をたどってきたのか。私たちは、もっとそうしたことを知らないといけません。これが人間としての「軸」になるものではないでしょうか。それが無いから、国家としてやるべき遺骨収集もほとんど尻すぼみとなり、時間だけが過ぎていつてしまうのです。

なぜ、ほかの人は同じように考えないのか

笹 遺骨収集の実態についてお話しすると、驚かれる方が多いようです。思考停止をしてしまうようで……。マスコミが報道しても「何を大げさな」とか「まさか」といふ。最初は思われてしまう。ところが私の話を聞き、そうではなさそうだと調べてみると、

徴兵された人たちはどんな気持ちだったのだろうか？